

# 氷将レオンハルトと 押し付けられた王女様

栢野すばる

SUBARU KAYANO



ノーチエ文庫

## レオンハルト

辺境にある国境を守る  
警備軍の総指揮官。  
氷の如く冷たい容貌から  
「氷将」<sup>ひょうしょう</sup>の異名がつく。  
どうい<sup>い</sup>うわけか突然、国王に  
リーザを託されて――？

## ジュリアス

カルター王国を治める若き国王。  
いつも妹のリーザを気遣っている。

## エリカ

カルター王立大学で  
火薬の研究をする博士。

## ヴィルヘルム

リーザの乳兄弟。  
カルター王立騎士団に所属する。  
リーザを護衛すべく  
彼女のあとを追ってくる。

## セルマ

極北レヴォントリ族の若い巫女。  
一族が祀る氷神に仕え、  
不思議な力を持っている。

## リーザ

カルター王国の末席の王女。  
愛妾の子で城の片隅で暮らす。  
大好きな研究に没頭していたが、  
国王である兄の計らいで  
レオンハルトのもとへ嫁ぐ。

登場人物  
紹介

## 目次

氷将レオンハルトと押し付けられた王女様

7

書き下ろし番外編

未来の欠片

353

氷将レオンハルトと押し付けられた王女様

## 第一章

「お前は私の妹、リーザをどう思う」

国王陛下に問われ、私、レオンハルト・ローゼンベルクは言葉に詰まった。

「リーザ殿下、でございますか」

「可愛いとか優しいとか、美しいとか」

なんだこの質問は。仮にもここカルター王国唯一の国境を守護する『氷将レオンハルト』に向けての問なのだろうか。私にそんなことを聞いてどうするんだ？

私は動揺して、国王陛下の麗しき紫紺の瞳から目をそらした。

「うーむ、リーザ様ですか」

答えにくい。国王の実妹でありながら、いまだに嫁のもらい手がない姫。

趣味が爆弾作りだということだけは、知っている。が、知っていても理解はできない。その話にどう反応すればいいんだ。

地下牢などの安全な場所で作業に励んでください、とでも申し上げればいいのか。

——いやあ、私は御免ですな。あの手の娘御は。

思わずそんな言葉が口から出そうになった。

いや、ダメだ、こんな答えでは。

いいところもあったはずだ。顔が綺麗とか、ほかにも……顔だけは綺麗とか……

「美人ですな、非の打ちどころもなく」

「そうか、君の気持ちはしっかりと私の心に収めた」

国王陛下がとろけるようなほほえみを浮かべてうなずいた。

「どんな気持ちは、ですか？」

「リーザを美しいと言ってくれた、お前の優しい気持ちはだよ」

私は、我が国最強の論客——すなわち陛下が語る話の続きを、固唾を吞んで待った。

「ああ、レオン」

真っ白な手袋に包まれた手を胸に当て、夢を見るような目をして陛下が言った。

「君の優しさに心からの感謝をささげよう」

——来る！ 陛下の無茶ぶりが来る！

「どうか私の愛するリーザを引き取っ……じゃなかった、娶っておくれ、我が腹心よ」

これはまたとんでもない一撃が飛んできた。

いやいや、これは。面白い、ハハハ。正直に認めよう。動揺して手が震えている。

「リーザをローゼンベルク家に降嫁させると、正式に決定した。ははっ、感動で声も出ないか」

「わ、私の意思は？ 私の意思を、確認してない、陛下、恐れながら」

やばい！ 声が裏返った！ それ以前に、ちゃんと話せてない！

「……リーザが爆弾ばっかりいじっているから、『危なすぎる』と苦情が殺到してな。

兄である私は、貴族院のお偉方<sup>えらうがた</sup>に烈火<sup>れつか</sup>のごとく説教され、リーザは座敷牢<sup>ざしきろう</sup>に軟禁されてしまった。お偉方<sup>えらうがた</sup>は『リーザ姫はずっと座敷牢<sup>ざしきろう</sup>に閉じこめておけ』と言っている」

陛下は自分の都合だけを並べ立て、大きくため息をついた。

美しいお顔には、疲労がにじんでいる。

——皆様の言うとおり、座敷牢<sup>ざしきろう</sup>に閉じこめておけばいいじゃないですか！ なんで私が

がそんな姫君を押し付けられるんですか！

もちろん、そんなことは口が裂けても言えない。

でも嫌だ。そんな変人姫を押し付けられるのは、嫌だ。

「お前も四十だろう。年貢の納めどきだ、レオン」

年貢の納めどきくらい、自分で決めさせてくださいよ！ なんで陛下が決めるんですか！

「お前は、私に忠誠を誓ってくれたはじめての騎士なんだ。信用しているんだよ」

陛下は、よよよと目頭を押さえた。

今度は泣き落としか！ くそっ！

私は相手に泣かれてしまうと強く出られないのだ。弱点まで完璧に把握されている！

「おめでとう」

「な、何がです」

「結婚、おめでとう。お前の花婿姿が見られるんだな、嬉しいよ」

国王陛下が涙をにじませて私にほほえむ。

だが嘘泣きなのは丸わかりだ。

「陛下、あの、陛下、お慈悲を……。私は、まだ結婚なんて……」

しない！ 絶対にしない！ したくない！

押し付けられてまで結婚なんかしない！ 私はこの二十年、仕事一筋でやってきたんだ。今結婚して、この国の守護という重責をおろそかにしたくはない！

そもそも私が四十歳まで独身でいた理由は、認めるのもせつない話だが、多忙で婚期

を逃したからだ。しかし独り身だと仕事に集中できて、むしろいいと思っている。  
いや、負け惜しみなどでは断じてない。そもそも私には弟が三人、妹も三人、甥姪に  
至つては三十人近くいるのだ。自分の子に爵位を継がせたいという願望はないし、優秀  
に育っている甥がいるから、彼にあとを任せようかと思っている。ゆえに、跡継ぎの間  
題もないのだ。

「君の母君、極北の大巫女であらせられるミラドナ様にも、すでに許可はいただいた」  
なんだと、陛下はあの鬼ババ……ではなく偉大なる我が母君にまで、手を回してい  
たのか！

「ほら、息子をお願いします、ありがたいお話感謝しますと、一筆いただいたよ」

陛下が得意げに取り出したのは、間違いなく我が母の筆跡による『結婚立会人の書面』。  
い、いつの間に……！

陛下はどうしてこんなに策士なのだ！

そういえば、陛下は去年の北方駐留軍の予算枠をどうやって拡大なさったんだろう。

貴族院の面々は『軍にこれ以上の予算はつきこめない！』って喚き散らしていたのに、  
翌日には予算が一・五倍になっていた。

怖い。頭がよすぎる国王陛下に、口で勝てるわけがない。

あと母上！ まず、息子に一言断ってくれ。

いくら独身のまま四十になったからって、焦りすぎだ！

「取り急ぎ誓約書に一筆もらえないかな、早く話を進めたい」

「あ、ハイ」

ああ、口が……口が勝手に「ハイ」って言ってしまった。理由は簡単。逆らう気力が  
尽きたからである。

こうして私は、二十三歳の厄介者……ではなく、麗しき王女殿下を娶ることになった。



わたしは、カルター王国の末席の王女、リーザ・カルター。

そしてこの国の国王陛下は、わたしのお兄様。

妾腹の子だったわたしたちは、お母様が早くに亡くなり、お城のすみっこで生きて  
きた。

お兄様が王様になれたのは、正妃様の子全員がお姫様だったから。

実は、五年前にお父様が突然亡くなるまで、次の王は正式に決まっていなかったみたい。

この国の王位継承権は、もちろん正妃の子が優位だ。だから当然、王位継承者を決める際には、異母姉様のだれかが『女王』になるべきだ、という声が多かった。

けれど、どの異母姉様も『国の舵取りなど無理です』と辞退された。お姫様として優雅に幸せに育った異母姉様たちは、王になるための勉強をまったくしてこなかったから。それで五年前、当時二十二歳で政務を手伝っていたお兄様に、お鉢が回ってきたらしい。以降お兄様は、日々仕事に追われている。それはこの国がお祖父様の代の失政で傾きかけているせい。お父様は命がけで国を立て直そうとしたものの、再建は完全にはうまくいかなかった。その負債を背負わされて、お兄様は『貧乏くじ王』なんて陰口を叩かれている。

亡くなったわたしたちのお母様は、異国からカルターの大学に留学して理学を勉強していたそう。賢くて、向学心に溢れた女性だったと聞く。そしてお父様の目に留まり、愛妾になったあとも、いろんなものをお城の塔で作っていらしたんだって。

お兄様いわく、お母様はいつも優しく明るい人だったそう。顔も覚えていないけれど、自慢のお母様。

お母様に似たのか、わたしも計算や理学にはちょっぴり自信がある。侍女には勉強より、女の子らしく刺繍やダンスを学ぶべきと言われていたのだけ。

だからわたしも何かをもっと勉強してお兄様の助けになれないかって必死で考えていたある日、部屋にいと、庭のほうから声が聞こえた。

「もっと質のいい爆弾さえあれば、鉦山の採掘作業はかどるのになあ」

「ローゼンベルクの新しい鉦山か。大雪の山岳地帯じゃ苦勞するわな」

思わずバルコニーに出て手すりから身を乗り出すと、わたしの耳に話の続きがはつきり届く。

「結局、除雪がてら手で掘るのが一番早いんじゃないか？ きつい仕事だよなあ」

「火薬を作るのは難しいからな。今、どの国もこぞって火薬の研究してるんだらう？」

男の人たちの声は、そのまま遠ざかってしまった。

気づいたら、わたしは指の色が変わるくらい強い力で、手すりを握りしめていた。

もし火薬の研究が進めば、お兄様の取り組んでいる交通整備のための掘削作業もどんなに楽になることだろう。

そのとき、ひらめいてしまった。

——わたしが爆弾を作ればいいんじゃないかしら、って。

お城には山のように本がある。



その中に、爆弾の作り方が載っている本もあるはず。

わたしはいつも、お兄様から「思いつきがズレている」と怒られる。だけど、一度好奇心を感じたら、なんと言われても、思い留まらない。体が勝手に動いてしまうから。

爆弾を作ろう。そう思いついたあとの、わたしの行動は早かった。

乳兄弟のヴィルヘルムを護衛代わりに連れて、城下町へ買い物へ向かう。そして「爆発岩の粉末」や「黒輝石の粉末」など火薬の原料を買い、自己流で爆弾作りをはじめた。

でも、一生懸命がんばったのに、わたしの爆弾はきちんと爆発しなかったのだ。

どの本に載っている製法を試しても、思いどおりにはいかなかった。

簡単にはあきらめられなくて、わたしはより一層爆弾作りに没頭した。

お兄様はカンカンになって怒ったわ。

『お前はなぜ、そんなに爆弾が作りたいんだ！』って。

だって、爆弾があればお兄様のお役に立てる。それに爆弾作りからは学ぶことが多くて、研究すればするほどハマってしまった。

——そして気がついたら、わたしは『変人姫』と呼ばれるようになっていた。

万年火薬臭くて、服はボロボロ、髪はぐしゃぐしゃ。仕方ないわ。十八歳から二十三歳になる今まで、わたしは研究一筋だったんだから。お洒落に興味を持つ余裕もなかった。

みんなは楽しそうに、汚れた恰好をするわたしの悪口を言った。妾腹の姫様は、生まれが悪いせいか、行動まで妙ちきりんだって。

こんなつもりじゃなかったんだけどな？

今頃わたしの爆弾のおかげで、カルターの土木工事は華麗なる発展を遂げているはずだったのに。

「あ、れ……？」

わたしは軽いめまいを感じて、おでこを押さえた。

いつからだろう、爆弾のことを考えると、めまいがするようになったのは。わたしはめまいをこらえて、長椅子に横になった。頭が重たくて仕方がない。

気分の悪さのため息をついた、そのとき——

「リーザ！」

部屋の扉の向こうから、わたしを呼ぶ声が聞こえた。

わたしは慌てて起き上がり、ふらつきながら扉を開けた。そして、驚きで目を見開く。「おい……さま？」

わたしが住んでいるのは、城の敷地の片隅にある、かつて物見台として使われていた高い塔。多忙なお兄様が、わたしのいる塔まで会いにくるなんて。一体どうなさったの

だろう。

「リーザ、お前をこんなところに閉じこめて、すまなかった」

「閉じこめる？」

お兄様の言葉を繰り返した瞬間、ぐらりと視界が歪む。わたしは昔から、この部屋で暮らしていたのではなかったのかしら。一体いつ『閉じこめられた』の？

思い出そうとするが、頭がぐらぐらして、よくわからない。

「話があるんだ。やつとお前を託せる男を見つけた」

お兄様が、わたしの部屋に足を踏み入れて言う。

「なんの、はなし、ですか？」

わたしはかすれた声で聞き返した。

言葉が、うまく出てこない。お兄様に聞きたいことがたくさんあるのに。

わたしは一体、どうしてしまったの？

「お前の降嫁先が決まったんだよ、リーザ。レオンのところだ……」

びっくりするほどやつれ果てたお兄様が、そう言ってぎゅっと目をつぶった。お兄様の苦しげな表情に、心の奥がざわざわする。

何か言ってさしあげたいのに、頭が働かなくて、何も言えなかった。

お兄様の白い手袋に包まれた指が、わたしの頬を撫でる。

ああ、お兄様にこんなふうに撫でてもらうのは、久しぶりだ。

そう思い、わたしはゆっくりと目を閉じた。

わたしの脳裏に、銀色の二つの月が浮かぶ。不思議、綺麗な、丸い月……

なんで月が、二つ浮かんでいるのかしら……？

やがて、意識は深く沈んでいった。

——わたし、お嫁に行くことになったんだ！

そう思いながら、わたしはむくりと起き上がった。

あれ？ いつの間に長椅子で眠ってしまったんだろう。最近、急に眠くなることが多いなあ……

お兄様は、いつ帰ったのかしら。

ほーっと考えていたけれど、不意にどうでもよくなった。

そんなことより、お兄様が決めてくださった旦那様のことを考えよう。

わたしの旦那様になるのは、王立騎士団、国境警備軍総指揮官を務めておいでの、レオンハルト・ローゼンベルク将軍。この国最高の武人のお一人に数えられる方だ。

レオンハルト閣下は極北の秘境レヴォントリの巫女を母に持つという。そして国境の街ローゼンベルクを統治する侯爵家の当主様でもある。

わたし、実は子どもの頃に、レオンハルト閣下に会ったことがある。とても優しく接していたので、以来、たまにお姿を見かけるたびに、胸ときめかせていた。声をかける勇氣はなくて、見つめているだけだったけれど。

わたしはため息を吐いて部屋の中を見回した。

テーブルの上には、お兄様が届けてくださった、彼からのお手紙があった。

『リーザ様。至らぬこともあるかと思いますが、今後ともよろしく願います』

それだけ書かれた、そっけない手紙だ。

でも、このそっけなさ、軍人らしくて素敵。

氷のような冷たい容貌で『氷将』と呼ばれるレオンハルト閣下は、貴族の令嬢やお

城の侍女たちの憧れの的。でも、仕事一筋で近寄りがない存在として扱われ、ずっと独り身でいらした。

嘘みたい。ずっと憧れていた最強の將軍様の、お嫁さんになれるだなんて。

お城では顧みられないわたしだけど、実は世界で一番幸せな女の子なのかもしれない。そう思いながら、わたしは飾り気のない手紙に、そっと口づけをした。



国王陛下に結婚話を持ちかけられてからわずか半月後、王都で結婚式が執り行われた。リーザ姫は、豪華絢爛なドレスを着て、繊細で美しいベールをかぶっている。

私にはよくわからないが、侍女たちが褒めていたので、あのドレスは大層綺麗なんだろう。

式の間、私は、異常なほど緊張していた。一方のリーザ姫は大人しくしてくださっていたので、ほっとした。お約束どおり、新郎の挨拶は囁きまわった。

リーザ姫を私に押し付けることに成功した国王陛下は、式の間中、上機嫌。

厄介払いができたからだろう。

リーザ姫は將軍レオンハルトという名のなんでも屋に押し付けた。

——これにて安泰。カルター国の支配者階級の方々は、正しい判断をなされた。私にとっては大迷惑な話ではあるものの。

式が終わると、花嫁は着替えのためにどこかへ連れていかれた。

ああ、疲れた。しかし、リーザ姫がどんなお嬢さんなのかさっぱりわからない。まあ、

彼女はまだ若いし、世間も知らないだろうから、私が大事にしてやらねば……もし、とんでもないわがまま娘だったら、どうしよう。

「レオン。式の直後に申し訳ないが、これから軍事会議に顔を出してもらえないか」

ボーツとしていた私の控室に、陛下が顔を出す。

それって、今、私に頼むべきことなのだろうか。そう思っても、ほかならぬ陛下の頼みだ。私は頭をボリボリかきながらうなずいた。

「はい、この花婿衣装のままでいいですか」

「衣装なんかなくてもかまわない……レオン」

陛下が私のすぐそばに歩み寄る。それから、麗しい顔を私の耳に寄せて囁いた。

「どうか、リーザを頼む。お前にしか、あの子の未来を託せない」

思いのほか深刻な声音に、私は驚いて顔を上げた。紫紺の瞳に切羽詰まった光が浮かんでいるのを見て、言葉を失う。いつも薄笑いを浮かべている陛下らしくない。

陛下はすぐに私に背を向け、入り口に待たせていた近衛隊員たちに囲まれて部屋を出ていった。

「お待ちください陛下、会議の場所がどこか聞いておりませんぞ」

そうだ、花嫁のことをだれかに頼もう。今頃、一人で心細い思いをしているかもしれ

ない。世間知らずそうだし、夫の私が気を配ってやらねば。

それにしても、なんで私はこんなにも忙しいのだ……挙式の当日くらい、花嫁と過ごさせてくれてもいいのに。



「リーザ様には、王都にあるレオンハルト・ローゼンベルク侯爵のお屋敷に、先に向かつていただきます」

質素な服に着替えさせられたわたしは、侍女の言葉に、ホツとしてうなずいた。お式が終わってからずっと放っておかれて、お城に帰ってもいいのか、それともレオンハルト閣下が迎えにきてくださるのかわからず、不安になっていたところだった。

「あの、ここで待っていればいいの？ わたし、どうしていいのかわからなくて」

「はい、ローゼンベルク家の方がお迎えにいらつしやると思います。あ、そうそう。今宵、おしとねに入られましたら、リーザ様のほうから『旦那様、帯を解いてくださいませ』と申し上げてください。ふん。閣下はさぞ、積極的で奔放な娘だと驚きになることでしょう。そのあとはすべて、閣下にお任せになりますように」

侍女がつまらなそうにそう言った。

「それはどういう意味？」

「どうもありません。初夜のご挨拶です。女としての常識ですよ、リーザ様」  
女としての常識……それは残念ながら、わたしが持ち合わせていないものだ。

侍女の言葉は、お兄様が教えてくださった内容と同じだった。初夜場で何をすればいいのかとお兄様におうかがいしたら、お兄様はなぜか耳まで真っ赤になられて『レ、レオンハルトに帯を解いてもらえばいい。あとは彼に任せるんだ。いいね、リーザ』と教えてくださった。そのことを思い出し、わたしは侍女にうなずいた。

「わかった、ありがとう。もう下がついていいわ……」

降嫁が決まってからというものの、以前から冷たかった侍女たちがますます冷たくなった。わたしが閣下に嫁ぐのが面白くないのだろうと薄々わかっていたものの、嫌われるのはやはり心が痛いものだ。

結婚式の日の花嫁って、こんなに寂しいものなのだろうか。

侍女が部屋を出ていった直後、力強くドアが叩かれる。わたしは驚いて飛び上がると、弱々しく返事をした。

「申し訳ない、遅くなって！ お迎えに上がりました。奥方様、わたしは閣下の副官の

ヘルマンと申す者です」

扉を開けたのは、驚くほど大柄な銀髪の男性だった。

「こ、こんにち……は……あ、あの……」

わたしは知らない人が苦手なのだ。うまく言葉が出てこず、椅子の上で縮こまる。

「あ、失礼。いきなり大男が現れたら驚きますよね。こんなナリをしておりますが、私は熊ではなく一応人間です。さ、奥方様、お手をどうぞ」

ヘルマンさんが、おどけたように一礼する。いつもイライラしている侍女より、ずっと優しくそうに見えた。わたしは少しだけホッとする。そして、ヘルマンさんに手を取られ、馬車に乗せられて式の会場をあとにした。

「閣下は本当にお忙しくて、式のあとですぐに軍事会議に入ったんです。でも、会議が終わったら奥方様のところに戻られますからね」

移動中、ヘルマンさんは明るい声で色々と話しかけてくださった。わたしは貴族の館が立ち並ぶ通りを眺めながら、ヘルマンさんの言葉にうなずく。

「閣下のお屋敷は質素ですが、きつと落ち着きますよ」

今になって、わたしはだんだん不安になってきていた。わたしはお城から出たことがほとんどないし、まともに話をしたことのある男性は、お兄様と乳兄弟のヴィルヘルム

くらいだ。

心細さでにじんだ涙をぬぐい、わたしは精一杯明るい声で親切なヘルマンさんに答えた。

「ありがとうございます。今日から……閣下にきちんとお尽くしします」

ああ、今日からはお兄様ともヴィルヘルム——ヴィルとも、気軽にには会えないんだ。今更、そんな大事なことに気づいて、また涙がにじんでくる。

……ううん、今は楽しいことを考えなきゃ。

初夜つて、旦那様と一緒に寝るのよね。旦那様に抱かれて寝るはず。ちゃんと事前に恋愛小説を読んで学習しているから、知っている。あの本は頭のいいヴィルが『これなら……お前に読ませてもいい……』って、選んでくれた小説だから、内容も信用できると思う。

一緒に寝たら何をお話ししようかな。わたしは動物の話をするのが大好き。元氣いっぱいしっぽを振る犬や、のどを鳴らして甘えてくる猫、大空をはばたく鳥。どんな動物も大好き。自分も動物になってみたいと夢見ることもよくある。一匹の小さな獣けものになって、カルターの大自然を思いきり走り回りたくなって、ぼんやり想像をするのも大好き。閣下は動物は好きかしら。お好きだいいな……

「さ、奥方様、ここがローゼンベルク家の公邸です」

お屋敷に到着すると、五十歳くらいの女性が出迎えてくださった。

「はじめまして、奥様。私、こちらのお屋敷で働いている侍女です。まあ、こーんな可愛いお姫様がお嫁に来てくださるなんて、閣下は果報者かほうものですこと」

大柄な女性が満面の笑みを浮かべて言った。

広いお屋敷の中を案内してくれ、寝室と、そこにつながる湯殿ゆどのの場所を教えてもらった。ヘルマンさんも彼女も本当に親切で、驚いてしまう。

作ってもらったスープとお茶をいただいて、わたしはようやく落ち着いた。

「お風呂に入られたら、このお部屋で旦那様をお待ちくださいね。私は朝、またご飯を作りになりますから。何かあったらヘルマン様か、警護の騎士様にお申しつけください」

「あ、ありがとうございます」

優しく笑いかけてくれた彼女に心から感謝し、お風呂で体を念入りに清めた。

「あら……?」

だが、体を清めたあと、用意していただいた寝巻きを着ようとして、わたしは首を傾げた。ずいぶん薄いし、すぐにズルズルと脱げてしまう。

わたしは帯を頼りなく巻いて寝台にちよつと横になった。今日は慣れない華やかな場

にいたせいで疲れてしまったのか、頭が重い。わたしはゆっくり目を閉じた――

「……ん……あら？」

いつの間に眠っていたのだろう。誰かが毛布をかけてくれたらしい。

わたしは目を開けて上半身を起こした。そして、部屋のすみにある机に向かっている人に気づき、口元を押さえる。

そこにいたのはレオンハルト閣下だった。閣下が戻っていらしたのに、わたしはぐうぐう眠っていたのだ。

わたしはしばし、淡い明かりに照らされた閣下の横顔に見とれた。きらめく銀の短髪に、たくましい体つき、切れ長で水色の目、厳しくも端正な顔立ち。わたしの亡きお父様に『氷将』という二つ名を贈られた美貌は、年を重ねてもまるで衰えを見せていない。わたしは意識がぼんやりとしたまま、閣下に声をかけた。

「閣下！」

「ん？ ああ、リーザ様、お目覚め……」

こちらを振り向き笑みを浮かべた閣下が、そのまま凍りついてわたしを凝視する。なんだろうと思い、わたしは首を傾げた。そして、自分の体を見下ろして慌てた。

「きゃあああああ！」

寝巻きが、大きくはだけてしまっている。どうやら起き上がった拍子に体からすべり落ちたらしい。

胸を殿方にさらしてしまったことに気づき、わたしは悲鳴をあげた。

どうしよう、体を見られるなんて嫌。わたしは自分の大きな胸がコンプレックスなのに。「ま、待て、大丈夫だ！」

閣下は椅子を蹴って立ち上がり、さっと横を向いた。

「リーザ様、いま私は何も見なかった！ 大丈夫だ！」

「う、う、嘘」

「嘘ではない、私は何も見ていない、偶然見えなかった。ま、まあ、リーザ様はお疲れでしょうから、そのまま寝台でおやすみください。私はそのへんの長椅子で寝ますから、大丈夫」

……長椅子で寝る？

わたしは閣下の言葉に驚き、すべり落ちた毛布を引き寄せながら言った。

「お待ちください、閣下も寝台でおやすみくださいませ。ここを独り占めして申し訳ございませんでした」

「い、いや、別に、私は今夜はリーザ様に何かしようなんて、まったく……あの、もつとリーザ様が色々とお慣れになったらで」

閣下はなぜか真つ赤になり、わたしから目をそらしておっしゃった。

よくわからないが、避けられているようだ。

旦那様はわたしのことをあまりお気に召していないのだろうか。

だとしたら寂しいな、と思ったとき、わたしはお兄様と侍女に教わったことを思い出す。

「あ、あの、閣下、わたしの帯を解いてくださいませ」

「えっ」

閣下が、低い驚きの声をあげる。

わたしは頭と胸に毛布をかぶり、お腹のあたりだけを出そうと試みた。だが、毛布でぐるぐる巻きになり、寝台から転がり落ちてしまう。

「きゃー！」

床に転がって足をばたつかせるわたしを、閣下が慌てて寝台の上に抱き上げてくださる。

「リ、リーザ様、何をなさっておいでなのですか！」

「……ふはっ。あのう、帯を解いてくださいませ！」

毛布から顔を出し、わたしは寝巻きの前をかき合せたまま、もう一度閣下をお願いした。

わたしの前にかがみこんだ閣下がゴクリ、とのを鳴らした。

「よろしいのか……あの、本当に？」

「ハイ！」

「意味は……おわかりなのかな」

「ハイ！ どうぞ、今夜からわたしを抱いて寝てくださいませ！」

そう答えた瞬間、わたしは寝台に押し倒され、閣下のたくましい体の下に組み敷かれた。帯どころか寝巻さまで勢いよく脱がされて、わたしは慌てて胸を隠した。

頭の中が真つ白になる。服を脱がされてしまうなんて、どうしよう……

帯を解いてはもらえたが、殿方に肌をさらすのは耐えがたい恥ずかしさだ。どうしたらいいんだろう。

閣下は何も言ってくださらない。そういえばお兄様も、このあとに関しては『彼に任せるんだ、いいね、リーザ』としかおっしゃってくださらなかった……

わたしはおずおずと閣下の精悍な顔を見上げた。

「あ、あの、リーザ様がそのようなお気持ちでいてくださったのなら、私は嬉しい」



「えっ、嬉しいのですか？」

「え、ええ、それはまあ……驚いたけど、嬉しい。泣いて嫌がられるかと思っていたから」  
閣下のお顔はとても優しい。こんなに優しい顔で殿方に見つめられたのは、はじめてだ。  
そうだ。どこどこしすぎて頭から飛んでいたけれど、閣下とお話したいことは、もう考えてあるじゃない。わたしは胸の高鳴りを必死に抑えて、閣下の水色の目を見て問いかけた。

「あの、閣下。動物は好きですか？ た、たとえば、えっと、獣けものになつてみたい、とか……」

「いえ、獣けものじみた真似まねは決してしません！ 今夜は私史上、最高に紳士として……失礼」  
閣下はわたしの話をさえぎり、羽織はおりっていた夜着を脱ぎ捨てる。無駄のない彫刻のような体があらわになった。

なんで閣下まで脱ぐのだろうか？ わたしが服を着ていないから？

腕で胸を隠しつつ考えこんでいると、閣下に抱きしめられた。

大きなたくましい体のぬくもりに触れ、不思議とうっとりしてきた。閣下はわたしの頭を抱き寄せ、長い髪を優しく撫なでてくださった。

「リーザ様、ちよっとお体を慣らしましょうか」

心地よさにとろけていたわたしは、びっくりして目を見張る。

「えっ、ならず……？」

「ええ、はじめてでいらっしやるでしょうから」

そう言つて、閣下はわたしの両腕を押さえつけた。

むき出しになった胸が、ふるりと揺れる。突然の出来事に悲鳴すら出ない。

「ん……っ」

唇を唇で塞ふさがれ、わたしは声を漏もらした。

口づけをするのは、はじめてだ。しかも肌をさらしたままなんて。あまりのことに、心臓が痛いほど高鳴る。

「力を抜いてください、リーザ様」

緊張で体を硬くしたわたしの腿ももに、閣下の手がかかる。軽々と足を開かれ、わたしはがくぜんとして悲鳴をあげた。

「いやあ！ そんなところ、見ないでえ……っ！」

必死に膝を閉じようとするのだが、閣下の力が強くて逆らえない。

「大丈夫です、痛いことはしないから」

「いや、何するの、怖い、怖い……っ」

閣下は大きな体がかがめ、もう一度、口づけをしてくださった。

「ん、ふ、っ」

舌先でそつと唇を舐められ、体の芯がゾクリと震える。

このような場面では、妻としてどう振る舞えばいいのだろうか？

わたしはゆっくりと口を開け、閣下の舌を受け入れようとした。そのとき――

「んう……っ！」

唇を塞がれたまま、わたしは声をあげた。

わたしの秘所に、閣下の指が触れたからだ。湿った足の間に太い指が沈み、ちゅくつという音を響かせる。

今まで感じたことのない、得体のしれない何かがわたしの体を震わせた。

閣下の手つきはとろけるように優しい。けれど、こんな恥ずかしいことをされるなんて――

「いや、っ、ダメえ……そんなところ、触っちゃダメ……」

「大丈夫です、リーザ様」

「だって、だって、汚いから……ん、ふ……」

再び唇を塞がれ、わたしはぎゅつと手のひらを握った。

お兄様はわたしに説明してくれなかったが、だれもがこんなことをするのだろうか。わたしは恐る恐る閣下に向かってみた。

「ね、ねえ、こんなこと、皆さん、なさいますの？」

「ええ」

閣下が、低い声で短く答える。落ち着いた声なのに、少し余裕がないようにも感じられた。

「しますよ、だれでも。大丈夫。だれもあなたに説明していなかったのなら、申し訳ないが」

閣下の指が、再びぬるりとわたしの奥に沈んだ。わたしの体の震えがひどくなる。

「ひ、っ、本当に？ ……んあっ、や……っ、やあっ……！」

視界が汗と涙でにじんだ。

素肌が触れるだけでも緊張するのに、こんなことまでされるなんて。

「……っ、うう……っ」

「うーん、やはり、ちよつと狭いかな」

閣下の指が、わたしのなかをゆっくりと行き来する。

「はあ、は……っ」

「だれでもする」という閣下の言葉を心の中で必死に繰り返し、わたしはぎゅつと目を

つぶって、閣下に身を任せる。

「失礼、リーザ様。二本入れると苦しいですか」

「には……ん……？ あっ、あー……ッ」

そのとき、体がかっ、と燃え上がった。

閣下の二本の指が、わたしのなかに入ってくる。そしてわたしの小さな芽のような部分を擦り、グチュグチュと音を立ててなかをかき回した。

わたしは少し腰を浮かせる。体が熱く、痺れて、疼きが止まらない。わたしの反応に満足したのか、閣下は指をズリりと抜いた。

「ひあ、っ」

指が内壁を擦ると、反射的に体が跳ねあがるほど快感が走る。

「気持ちいいですか、リーザ様」

「わ、わから……な……い」

朦朧としたまま、わたしは閣下の銅のような腕に手をかけた。

すると閣下の分厚い胸に、わたしの硬くどがりはじめた乳房の尖端が触れてしまう。

恥ずかしい。隠そうとして胸を手で覆ったが、閣下は優しくそれをどかした。口づけとともに足の間に指を這わされて、もう何も考えられなくなった。

「もう少しだけ慣らしていいかな」

「な、なにを、ひ、っ」

グチャグチャに濡れたわたしの足の間に、閣下が再び指を差し入れた。

「あ……あ……あ……」

秘部が襲のように閣下の指に絡みつく。わたしを見つめる閣下の額に、一筋の汗が伝うのが見えた。

「痛いですか、リーザ様」

「い、痛くは、あ……」

わたしは涙に濡れた顔を、手で隠した。体のなかをゆるゆると攻められる感覚に声をあげ、反射的に腰をくねらせて、閣下の指から逃れようとする。

「いやあ、っ、あ、っ、あ、っ、ダメ……」

じわじわと絡みつくような熱さに苛まれ、わたしは腰を浮かせて首を振った。

足の間から溢れだした蜜のようなものが、とろりと足を流れていくのがわかる。

何が起きているのだろう。わたしはどうしてしまったんだろう。

「ずいぶんと、感覚がよろしいな」

嬉しそうに閣下がおっしゃった。

わたしは恐る恐る目を開け、彼の水色の瞳を見つめる。

——そして、本能的に悟った。わたしは今から、この人に食べられるのだ、と。

「か、閣下、あの」

もう、これ以上のことは許してください。

そう言おうとしたとき、閣下がわたしを抱きすくめておっしゃった。

「申し訳ない、リーザ様。もう、我慢できそうになくて」

むき出しのわたしの乳房が、閣下の分厚い胸に押しつぶされる。

抵抗を試みて足を閉ざそうとしたが、閣下の膝にあっさりとこじ開けられた。

「ひっ」

「今から姫様を抱きます。そのまま私に身を委ねてください」

わたしの両足を肩の上に抱え上げ、閣下が顔をわずかにほころばせた。

こんなに恥ずかしいことをしているのに、幸せそうな笑顔だった。

閣下の笑みを見て、わたしのこわばった体が、わずかに緩む。

「リーザ様、痛かったら言ってください」

「あ、あ……」

わたしは首を振って目を閉じた。

この、体の芯に脈打つ熱はなんなのだろう。わたしはこれから、どうなってしまうのだろう。

「は、あ……」

閣下の足の間で反り返っていたものが、濡れそぼった秘部にあてがわれたのがわかった。そのまま、すさまじい圧迫感と共にそこが押し広げられた。

「っ、あ、やあっ、痛い……!」

ミチッ、という音を立てて、体を開かれる。

薄目を開けたわたしの視界に、閣下の汗ばんだ胸が映った。

「んあ、っ」

ぐちゅぐちゅと恥ずかしい音が響く。押しこまれた大きなものが不意に抜かれ、また入った。閣下が、濡れたわたしのなかをゆっくりと行き来しているのだ。

わたしは必死にもがいた。

「いや、いや、やめて……無理……体、裂けちゃう、っ」

「大丈夫、大丈夫だから」

わたしの頭を抱き寄せ、閣下がとても優しい声でおっしゃった。

「リーザ様、力を抜いて。私につかまってい」

菌を食いしぼっていたわたしは、ふと気づいた。

そうだ、閣下も汗だくだ。つらいのはわたしだけではいけないのかもしれない。

わたしは勇気を振り絞って、足をそうと開いた。

「ありがとう。リーザ様もそのほうが痛くないはずだ」

「んっ」

奥深くまで、閣下のものがねじこまれる。

わたしはぎゅっと目をつぶり、体が裂けぬことだけをひたすら祈った。

「う、う、も、これ以上、無理……」

「大丈夫です、ほら」

なだめるような口調で閣下がおっしゃって、わたしの硬くなった胸の先端をキュツ、とつまんだ。

「ひあっ」

驚くほどの刺激が、体の芯に走り、わたしの体が跳ねた。

「こうすると、もっと濡れるはずだ」

咥えこんだままだった閣下のものが、ぐいっとわたしの奥を突いた。

「あ、あ、こんな深い、ムリ……っ」



わたしは涙に濡れた顔を隠すのも忘れて、閣下の腕を必死に握りしめる。

「なんて素直な可愛らしいお体をなさっているんだろう、リーザ様は」

閣下が、わたしを貫いたまま、わたしの体をぎゅうつと抱いた。そしてわたしの頭に優しく頬ずりし、再び動きだす。

くちゅくちゅという音が聞こえる。わたしの秘所が閣下のものを舐めているみたいで、たまらなく恥ずかしい。

「閣下、これ、恥ずかしいっ……やめ、て」

閣下が大きな手でわたしの顔を包み、口づけをしてくださった。

どうようもなく体がほてる。くちゅり、とひときわ大きな音が、わたしの足の間から響いた。

「ん、う、うつ」

先程よりも情熱的に舌を絡められ、わたしはただ閣下を受け入れた。体を貫く閣下のものが、大きくて熱くて、少し怖い……

「リーザ様は、私とこうするのはお嫌か」

「え、い、嫌じゃない……怖い、だけ……」

怖いのはたしかだが、大丈夫かもしれない。

こんなに奥まで閣下を受け入れても、怪我一つしていないではないか。

わたしは思いつて、閣下の背中に手を回した。すると、閣下は小さく笑う。

「よかった。私もあなたをもう離したくなくなった」

「んっ、ふ……」

再び閣下に口づけられ、わたしは目をつぶった。口内に差し入れられた舌を、同じように絡め返す。

「ん、うつ、ふう……う」

淫猥な水音が激しさを増した。わたしは背を反らして、閣下の口づけを無我夢中で受け止める。閣下の指が優しくわたしの腿を開き、わたしたちはより一層、深く絡み合う体勢になった。

閣下の巧みな動きで体を上下に揺さぶられながら、内壁を幾度も擦られる。わたしはその甘い刺激に耐えた。

「あ、ああ……この音、恥ずかし……」

くちゅくちゅという音が、静かな部屋に響き渡って、たまらなく恥ずかしい。わたしは足の間に力をこめ、なんとかその音を止めようと空しい努力を続けた。

「ひああ、っ、は、っ、やだ、大き……」

痛みよりも、体のなかで膨らむ熱を持て余すことのほうが、苦しくなってきた。閣下のことを、愛おしく感じる。この体を閣下の好きにしてほしい。

「ああ、あ……っ、あ、っ、閣下の、熱い、い……」

「リーザ様、ああ、なんてお可愛らしい方なんだ」

どろどろにとろけた体の芯から、蜜がとめどなく溢れる。

どれほどの時間、閣下に抱かれていたのだろう。

朦朧としたわたしの耳元で、不意に閣下が「すまん」とつぶやく。

わたしのなかの閣下のものが硬くこわばり、どぶ、と熱いものが弾けた。

「んあ、あ、あ、あああっ」

わたしは叫びながら閣下の体にすがりついた。閣下はわたしを苦しいくらいに力強く抱きしめてくださる。

しばらくして、彼の腕の力がそっと緩んだ。

「すまん、リーザ様、手荒にして……つい、夢中になりすぎた」

「だいじょうぶ、です」

閣下に体を預けたまま、わたしはかすれた声で小さく答えた。

必死で泳いでようやく陸に這上がったときのような疲労感が、わたしを包む。

「っ、ふ……」

行為の最中に比べればずっと紳士的な口づけが、唇に降ってきた。

夫となった彼の体の熱をうっとり味わいながら、わたしは身を委ねた。

すっぱりと『旦那様』の体に包まれて、生まれてはじめての不思議な安心感を味わう。

「リーザ様からは、本当にいい香りがするな……さ、こちらにおいで」

わたしは素直にうなずき、旦那様の広い胸に頭をのせた。旦那様の腕が、わたしの背中をそっと抱き寄せる。

ああ、たしかにわたし、旦那様に抱かれて眠るんだわ……

そう思いながら、わたしは目を閉じた。

## 第二章

旦那様と一緒に、王都の公邸から国境の街ローゼンベルクへやってきて、三日。わたしは順調にこの街での暮らしに慣れはじめている。

ローゼンベルクは王都からとても遠かった。碎氷船に乗って海を渡り、一週間も旅し

たの。この海路が最短経路なんですって。

ここカルター王国は、大陸から東に突き出した半島だ。大陸に接する西側に山脈が連なり、残りの三方は海に面している。『国境』と呼べる場所を有するのは、西の山脈の合間に位置する国最北の地ローゼンベルクの街だけ。

旦那様は、西のリアルデ王国、極北地方に広がる大氷原との国境を守る將軍閣下というわけ。

国境を長年守り続けている旦那様は、すごく頭がいいし、將軍としての能力がばつぐん。最強なのに威張らないところなんて、本当に素敵な人だなんて思う。

人に厳しいお兄様も、旦那様のことは信用なさっているみたい。

そんな旦那様と一緒に船に乗るのは、楽しかったなあ。

新婚旅行みたいだってうきうきしていたら、あつという間にローゼンベルクに着いちかった。

旅を思い出しながら居間で機嫌よく旦那様の襟巻きをたたんでいたら、庭の門が開く音がした。

「旦那様、お帰りなさいませ!」

わたしは玄関から、雪の積もったお庭に飛び出す。

仕事を終えて戻ってきた旦那様が顔を上げた。無表情だった彼は、わたしを見ると優しい顔になる。

「リーザ、変わりはなかったか」

「はい!」

リーザと呼び捨てにされて、なんだかもしもじしながら、わたしは表情を緩める。リーザ。そう。わたしは旦那様のリーザになったの。

旦那様のたくましい腕を取って、暖かな居間に引つ張っていく。

「こら、リーザ。あまり急ぐな」

わたしは旦那様を振り向いてほほえみ、背伸びをして彼の頬に口づけをした。

ひげが少しチクチクする。わたしの心に、かすかな快樂が湧く。

このなんとも言えない心地よさは、旦那様に触れたときにしか感じない。旦那様がわたしに教えてくださったものだ。

「リーザ。ここは王都と違って治安がよくないから、家の外に勝手に出ないように」

「はい、わかりました」

力いっぱい抱き寄せられ、わたしは旦那様の胸に頬を押し付ける。

肩のあたりが、ひんやりと冷たかった。



「あの……お寒かったでしょう……」

「え？ ああ、雪がすごかったからな」

「夕餼ゆうげは取られましたの」

「うん、兵や将官たちと食べた」

こちらに来てから、旦那様はいつも外でご飯を召し上がって、家に戻られる。わかってはいたけど、今日はまだだといいなと淡い期待を抱いていた。

地元の女性たちがわたしを訪ねて、この地方のスープの作り方を教えてくれたのだ。スープは信じられないくらいおいしく作れた。

雪の下に生える辺境の珍しいキノコをたくさん入れたスープ。

旦那様にも食べてもらいたかったが、食事が済んでいるなら仕方がない。

「どうした」

「いいえ」

わたしは首を横に振りつつ、居間に入った。

そうしたら、旦那様は鼻をひくつかせて、厨房ちゅうぼうに足を踏み入れる。

「あ、おいしそうなものがあるな」

旦那様は鍋のふたを開け、わたしを見た。

「リーザが作ったのか」

「は、はい！」

「じゃあ食べようかな」

薄い水色の目を細め、ほほえみかけられる。わたしは天にも昇のぼる心地でスープを温めて、カップによそった。

最近は爆弾作りを忘れるくらい幸せで、毎日が夢のよう……

機嫌のいいわたしを、旦那様がそっと抱き寄せてくれた。彼の体の熱が、わたしに伝わる。

「あの、スープは？」

抱擁ほうようを解いてもええず、わたしはおずおずと旦那様を見上げた。

「旦那様、あの……」

「スープはあとでもらおう。まずは、リーザを味わってからだ」

わたしはあまりの恥ずかしさに、うつむいた。

でも……わたしも、そのほうが嬉しいかも……

寝台で唇を塞ふさがれ、服を脱がされる。気づけば、わたしは旦那様に跨またっていた。

どうしよう。こんなふうには旦那様の上にのるのははじめてだ。

いつもと違う体勢に戸惑い、わたしは旦那様を体のなかに受け入れつつ、目を泳がせた。  
「どうした」

旦那様のお声は優しいけれど、どこかからかっているようにも聞こえる。

「ん……っ、あ、あのっ」

旦那様の肌に触れているだけで、体の芯がしつとりと濡れてきた。

わたしのすごく深いところを、旦那様は容赦なく突きあげてくる。

身をくねらせたくなるほどの気持ちよさだ。

震える腕で熱い胸にすがりつき、わたしは上から旦那様の顔を覗きこんだ。

「あの、旦那様。わたし、旦那様にのるの、上手にできているでしょうか……」

「動いてくれないと、わからないな」

旦那様は意地悪だ。

わたしは口をへの字にし、旦那様に跨ったまま、おずおずと体を前後させた。

体の疼きに合わせて、淫らな声が漏れてしまいそうになる。

旦那様の分厚い肩をつかんで、必死に声をこらえた。

屋敷に来てすぐに教えてもらったことを思い出し、旦那様に聞く。

「あ、あの、旦那様、……っ、んっ、このお屋敷、壁が薄いんでしょう？」

「薄いよ、見るからに薄いだろう」

旦那様がのどを鳴らした。からかわれているのはわかる、のに、体が……

「ひ……っ、あ、ああっ」

旦那様にお尻をつつと撫でられ、体温が上がる。もつと旦那様が欲しくなり、わたしはひたすら不器用に腰を動かした。ふだん旦那様がしてくださるように、抜き差しをし  
てみようとする。

だが途中で、乳房がみつともないくらい揺れていることに気づき、慌てて片手で隠した。  
下から胸を見られるなんて、恥ずかしすぎる。

「リーザ、なぜ隠す。最高の眺めだったのに」

「あ、の、恥ずかしい、から」

「ほら、もつとその美しい足を開いて、私を気持ちよくしてくれ」

「やあ……っ、そんなの、できませ……ん、あっ、あっ、ああ……」

旦那様がわずかに腰を持ち上げると、クチュツという音を立て、わたしの秘部が旦那  
様のものに絡みつく。

どうしてこんなに反応してしまうんだろう。少し動くだけで、声が漏れるほど気持ち

いい。

これ以上何かされたら、外に聞こえるほど大きな声を出してしまいそう。

「も、ゆるし……て……」

わたしは哀願し、旦那様の体にしがみついて口づけする。

旦那様がわたしの髪を撫で、少しのどを鳴らした。

「すまん、すまん。あまりにも反応が可愛くて、つい」

旦那様は体を起こし、わたしの顔を引き寄せて口づけをしてくださった。

突然の激しい口づけに、わたしの体の芯がきゅんっと締まる。

「ふあ、っ、んっ」

「お前は、声も可愛い。何もかも可愛すぎる」

唇を離し、旦那様が低い声でおっしゃった。

そのまま、ひよいと両腕で抱き上げられる。旦那様自身が抜かれ、わたしの体との間に未練がましく一筋の糸を引いた。

わたしはまだ離れたくない。もっともっと旦那様とつながっていたいのに……

「よし、もう少しお前の可愛い声を聞こう」

わたしはそのまま寝台の上にそっと横たえられ、大きく足を開かされた。

手で濡れそぼった裂け目を隠そうとするが、旦那様は当然許してくださらない。

わたしの手首を掴んで、指に何度も優しく口づけ、旦那様はおっしゃった。

「リーザ、私が王都で見た白薔薇は、お前みたいに美しい花だった」

「い、いや、違う……わたし、そんなに綺麗じゃ……ん……っ」

「お前は綺麗だよ。甘い香りがして、真っ白で、芯は桃色に染まっている。白薔薇そのものだ」

旦那様の熱い塊が、焦らすようにわたしの秘裂をゆっくりと貫いた。

溢れだした蜜が、淫らな水音を立てる。

その音を聞いているうちに、わたしの体の芯がじんじんと疼きはじめた。

「ん、あ……ああ、旦那様。だめ、気持ちよくしないで」

声が出てしまうからと訴えたのに、旦那様に動かれてしまったら、無理。

手近にあった小さなクッションを顔に押し付け、声を抑えた。

だがそれも取りあげられ、両手首を押さえられてしまう。

「ん……っ、あ、あああ、っ」

だめ。声を我慢できない。体の芯が溶けてしまいそう……

わたしは旦那様に激しく突きあげられ、ひたすら体をのけぞらせて快楽を逃そうと

した。

「ん、ううつ、は、あ、旦那様、あ……ッ」

「ここはどうだ、リーザ」

旦那様がからかうような声で囁く。

「ひっ」

裂け目の縁にある小さな芽を指でいじられ、体がビクンと跳ねた。

「んっ、やあ、ふ、あ……っ」

秘裂の入り口を撫でながら、旦那様が目を細める。

「そうか、なかも外も、どちらも感じるのか。美しくて食欲なんて最高の奥方だな」

旦那様が満足そうにおっしやり、ますます硬くなったものでわたしのなかを激しく突きあげた。

「ひあ、あ、あああつ、は、あ、やだあ……っ、口塞いでえ、っ」

旦那様はわたしを掻き抱き、唇を重ねてくださった。

わたしはあまりの快感に、熱く反り返る旦那様のものを、きつくきつく締めあげる。

たくましい体に無我夢中ですがりつき、旦那様の腰にわたしの足を絡めた。そして舌も絡め、快楽の奔流に押し流されまいと足に力を入れる。

「ん、くっ、ふ……うつ」

旦那様がわたしの頭を抱き、苦しげな声で名前を呼んだ。

「リーザ」

「んっ、だんなさ、まあ……っ、あ、ああ」

体がかくかくと震える。旦那様を呑みこんだ膣内が、耐えがたいほどに痙攣する。

「く……っ」

旦那様が苦しげに息を吐く。

わたしのなかで、旦那様のものが信じられないほど熱くなって震えた。

体の奥に熱の広がりを感じ、旦那様の背中を抱きしめる。

「あ、あ……だんな、さま……っ」

果てたあとは、いつも思う。

大きな体の旦那様が、可愛くて、愛おしいって。

しばらく抱き合い、口づけを交わし合ったあと、そっと旦那様が離れた。

「ああん……っ」

ずるりという音とともに強い快感が背に走り、わたしは思わず声を漏らす。まるで甘い痺れ薬を吞まされたようだ。